論　　文　　要　　旨

申請者氏名　徳吉　敬介

申 請 学 位　博士（言語教育学）

主論文題目：言語間における緊張度の違いがアクセント生成に及ぼす影響

―日本人スペイン語学習者とスペイン人日本語学習者を対象に―

Differences in degree of tension between languages

-For Japanese students learning Spanish and Spanish students learning Japanese-

主論文要旨（邦文は４，０００字以内
外国語は２，０００語以内）

本論文は、緊張という概念を用いて、日本人スペイン語学習者におけるスペイン語のアクセント生成の誤りおよびスペイン人日本語学習者における日本語のアクセント生成の誤りを通して論じたものである。

第１章では、本研究の目的、対象領域、ならびに構成について述べる。

日本人スペイン語学習者のスペイン語の発音も、スペイン人日本語学習者の日本語の発音も、それぞれの母語話者に伝わりやすいと言われている。その理由として、 両言語には５つの母音音素、それぞれ音声的に類似した子音（音素）が多くあること、また、アクセントに関して、スペイン語はストレス、日本語はピッチが弁別的であると言われているものの、生成上の共通した特徴があることがあげられる。例えば、日本語話者が、”casa”をカタカナ表記した「カサ、カーサ」(casa)のように発音してもスペイン語話者には理解されやすい。また、スペイン語話者が「かさ（傘)」をスペイン語の”casa”で発音しても、日本語話者は理解できる。しかし、これらの例は、互いの言語話者が理解できるというレベルのものである。「～語」らしさの発音に近づけるには、何が必要となるのであろうか。また、それに対してどのような発音矯正法が望ましいのか。こういった問いに答えていくのが本研究の主目的である。

そこで、本研究では、日本語とスペイン語をそれぞれ母語とする者（学習者）の両言語の学習（学習言語）における母語干渉はどのようなものなのかについて言及し、また「～語らしい」発音に必要な要素は何かを VTS の五つの原理を基に、緊張の概念の範囲にて証明し、「～語らしさ」に向けた音声指導に新しい視点の提示を目指す。管見の限りでは、スペイン人日本語学習者の日本語のアクセント生成および日本人スペイン語学習者のスペイン語のアクセント生成を対象に、緊張の概念を用いて、母語干渉の影響および「～語らしさ」を論究した研究は見当たらず、本研究が初の試みである。本研究が両者の音声教育に何らかの貢献となれば本望である。

本研究は 6 章から成る。第 1 章に続き、第 2 章では、先行研究および課題を概観し、本研究の理論的支柱となる VTS の原理および緊張の概念について解説した。第 3 章では、日本人スペイン語学習者を対象に行った調査結果を述べ、アクセント位置の誤りに対する考察をした。第 4 章では、日本人スペイン語学習者による強勢アクセントと長音の代替現象を対象に実施した実験について扱った。第 5 章では、第 3、4 章で得られた結果をふまえて、スペイン人日本語学習者を対象に行った実験の結果を分析し考察した。第 6 章では、本論文で明らかになった事柄をまとめ、今後の展望を述べた。

第 2 章では、スペインにおける日本語教育は、発展途上の段階であり、先を見据えた場合、さ

らに様々な課題が示されることを指摘した。とりわけ、スペイン人日本語学習者の日本語の発音に関する研究は、非常に限られており、課題が多く残されている。一方、日本人スペイン語学習者のスペイン語の発音に関する研究に焦点をあてると、リズムやイントネーションといったプロソディを扱った研究は増えつつある。しかし、アクセント生成を対象とした研究は多くを見ず、さらに、母語干渉に関する研究はほとんど見当たらない。

さて、日本人スペイン語学習者のスペイン語の発音において、日本語の音韻体系に基づいて発音するといった音声的誤りが起きることは、つとに知られた事実であるが、これは両言語のアクセントに共通の原理が働いているからではないかと示唆される。なぜならスペイン語と日本語のアクセントには、ストレスとピッチがそれぞれのアクセント構造を決定づけるという相違点があるが、長さや位置などの類似点も見られるからである。そこで、本論文では、日本人スペイン語学習者の中にスペイン語の発音を容易だと考える者がいることは、両言語の類似点によるところが大きいのではないかと予想した。また、それと同時に、こういった類似点は、一歩間違えれば母語干渉の影響を受ける原因にもなること、学習者が母語干渉を克服し、「～語らしさ」を習得するには、音韻構造に基づく最適な音声要素の選択が重要であることを VTS の五つの原理をもとに述べた。

そして、両言語の音声的特徴、傾向を説明する上での、また、本調査結果における分析に際して拠り所となる言語教授法として、VT 法を紹介し、それに関連して緊張という概念について述べた。

第 3 章では、日本人スペイン語学習者を対象に、アクセント位置による正誤およびアクセント位置の傾向、特にカタカナ語アクセント規則の影響を探るため、アクセント位置の指定がある CVC のスペイン語を中心に読み上げてもらった。

その結果、アクセント位置の誤りは、母音の挿入、拍リズムへの変化、カタカナ語のアクセント規則という 3 点が連関することによって起きることがわかった。この結果を緊張という概念を用いて考察した。

第 4 章では、スペイン語学習者が両言語のアクセントに対して共通の音声的認識が働いているとすれば、アクセント位置で長音と強勢を弁別していないという仮説をもとに、調査語を“palabras llanas”に限定し、スペイン語発音の過程において母語である日本語音声がどのように影響するか、そしてスペイン語らしい発音に近づくためにはどのような点が重要であるかについて検討した。具体的には、スペイン語学習者のスペイン語のアクセント位置における強勢と日本語の長音の弁別を探ることを目的として、調査を実施した。

調査結果と考察を通して、日本人スペイン語学習者によるスペイン語のアクセント生成は、緊張から弛緩へ変化させるといった音声上の置き換えが起こることがわかった。日本語の音声で、緊張から徐々に弛緩していく音声的特徴を持つ母音は、長（母）音であり、日本語音声の中でも緊張度が低い。日本人スペイン語学習者によるスペイン語のアクセント生成は、こうした長音の持つ音声的特徴と一致した。そのため、アクセント生成の誤りは、言語間における緊張度の違いによって起きることが明らかになった。

第 5 章では、第 4 章で明らかになった言語間における緊張度の違いをさらに検証するため、今度はスペイン人日本語学習者の日本語アクセントの生成を対象に調査をおこなった。

スペイン人日本語学習者がアクセント位置で強勢と長音を弁別していないという仮説をもとに、母語であるスペイン語の音声がどのように影響するか、また、日本語らしい発音に近づくためにはどのような点が重要であるかについて探ることを目的とした。

その結果、スペイン人日本語学習者による日本語のアクセント生成の誤りは、緊張過多によるところが大きいことが明らかになった。また、日本語の長音を母語の音韻体系に基づいて発音していることがわかった。

その理由として、スペイン人日本語学習者が母語話者に比べ、ピッチの変化量（高低差）が大きいこと、弛緩のタイミングが遅いこと、徐々にではなく急激に弛緩させるといった緊張の構造面の違いがあることが挙げられる。これらは、第 4 章の調査結果で見られたスペイン人のアクセント生成の傾向と類似している。いずれも弛緩が緊張へと変わることによって引き起こされた結果であり、こういった緊張度の誤りは、日本語らしい発音を歪める原因になる。従って、第 3 章以降の調査結果を通して、アクセント生成の誤りは、言語間における緊張度の違いによる影響であることが明らかになった。

第 6 章では、全体のまとめを行い、調査結果と考察を通して得られた成果について述べ、今後

なされるべき課題を示した。本研究を通して得られた成果は以下の通りである。

両者のアクセント位置の誤りが共通の音声的認識が働いていることによる影響であると証明できたことは本研究の第一の成果である。

両言語の発音において、長く発音するという共通点があるものの、緊張の概念を用いると両者間に差異が見られる。両言語学習者間の長さに注目し、緊張という概念から明らかにしたことは本研究の第二の成果である。

ピッチの変化を通して、徐々に弛緩するのか、急激に弛緩するのかという緊張の構造から、両者の言語間における緊張度の相違を明らかにしたことは本研究の第三の成果である。

以上、両者間の発音の傾向をもとに、音声指導を考えれば、スペイン人には正しい日本語の発音時に弛緩に目を向けさせること、日本人にはスペイン語の発音時に緊張に目を向けさせることが重要であることを述べた。そして、本研究の目的である「～語らしい」発音を歪める原因は何かという疑問に対して、緊張という概念を用いて一つの結論を出した。それは、言語間における緊張度の違いが「～語らしい」発音を歪めるということである。こういった、言語間における緊張度の違いを明らかにした本研究は、身体と発音を連動させた発音指導法の考案を行うための基盤となると確信しているが、今後の研究に向けて更なる考察及び改良が求められていることは至極当然である。

まず、緊張という概念は、音声指導において非常に有益であるため、音声指導の具体的な考案および実践までには至らなかった点で課題が残る。今後の展望の第一歩として、「～語らしい」発音に向けてわらべうたを用いた指導法の紹介をしたが、今後は、VTS の五つの原理と緊張の概念に基づく、学習者が自ら体得することに焦点を当てた指導法の考案が研究目標になる。身体の動きを用いて正しい音声を誘導するという生理的側面を持つ身体リズム運動を、なぜそういう動きになるのか、また単音（など）を誘導する動きは一つだけではないことを念頭に置きつつ、更なる発展に向けて、こういった理由を物理的（科学的に）にも解明していくことが今後の課題として残される。